



図2 初音書棚 A 棚板の亀裂 修理後



図1 初音書棚 A 棚板の亀裂 修理前



図4 初音書棚 A 木地構造の亀裂 修理後



図3 初音書棚 A 木地構造の亀裂 修理前

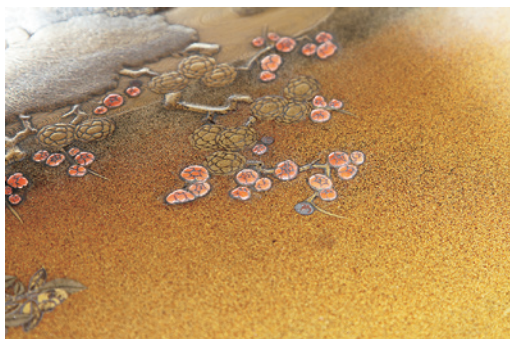


図6 初音書棚 B 高蒔絵周囲の汚れ 修理後

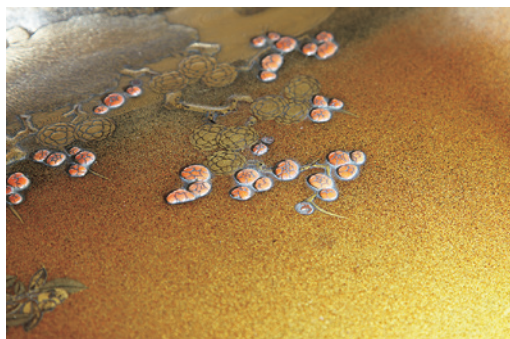


図5 初音書棚 B 高蒔絵周囲の汚れ 修理前



図8 初音書棚 B 左二段目の棚板の亀裂 修理後



図7 初音書棚 B 左二段目の棚板の亀裂 修理前



図10 初音書棚B 木地構造の亀裂と隅金具の浮き
修理後



図9 初音書棚B 木地構造の亀裂と隅金具の浮き
修理前

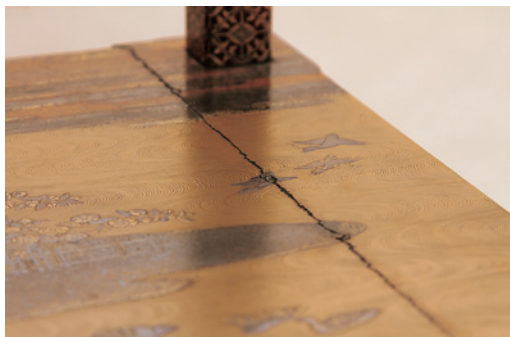


図12 胡蝶書棚 右一段目の棚板
亀裂と塗膜剥離 修理後



図11 胡蝶書棚 右一段目の棚板
亀裂と塗膜剥離 修理前



図14 胡蝶書棚 右一段目の棚板裏
亀裂と塗膜剥離 修理後



図13 胡蝶書棚 右一段目の棚板裏
亀裂と塗膜剥離 修理前



図16 胡蝶書棚 地袋天板 正面左接合部の亀裂
修理後



図15 胡蝶書棚 地袋天板 正面左接合部の亀裂
修理前



図18 胡蝶書棚 木地構造の亀裂と隅金具の浮き
修理後



図17 胡蝶書棚 木地構造の亀裂と隅金具の浮き
修理前



図20 胡蝶書棚 天板と支柱の接合部 修理後



図19 胡蝶書棚 天板と支柱の接合部 修理前

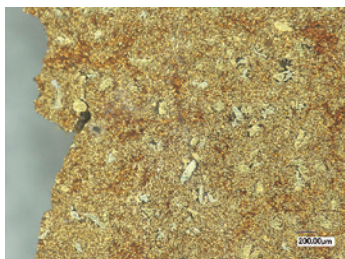


図23 塗膜片 表 部分拡大①



図22 初音書棚B 塗膜片 裏

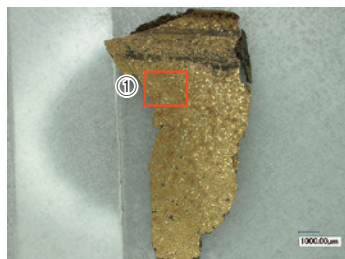


図21 初音書棚B 塗膜片 表



図26 塗膜片 裏 部分拡大④
布貼りが見える

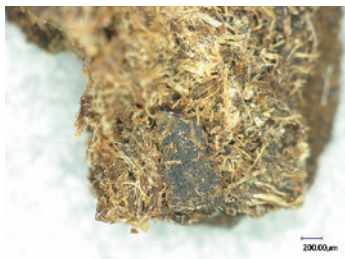


図25 塗膜片 裏 部分拡大③
黒色の塊が見える



図24 塗膜片 裏 刻芋彫り部分
拡大② 繊維が見える



図27 初音書棚 A 底裏
修理前



図28 初音書棚 B 底裏
修理前



図29 胡蝶書棚 底裏
修理前

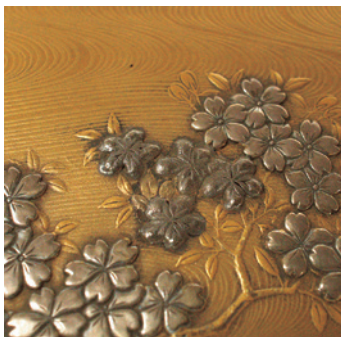


図32 左二段目棚板



図31 左一段目棚板
端喰の補修箇所

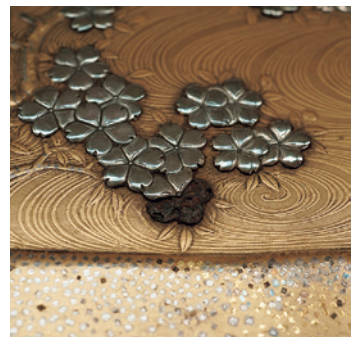


図30 天板中央手前
銀の桜花がとれた箇所

〔修理報告〕

国宝 初音蒔絵書棚 二基・胡蝶蒔絵書棚 一基の修理について

吉川 美穂

はじめに

- 一 書棚三基の概要と修理前の状況
 - 二 修理方針
 - 三 初音書棚Aの修理
 - 四 初音書棚Bの修理
 - 五 胡蝶書棚の修理
 - 六 書棚三基の調整
 - 七 修理による新発見
- おわりに

はじめに

徳川美術館に所蔵される国宝「婚礼調度類（徳川光友夫人千代姫所用）」計七十件のうち、「初音蒔絵見台」二基と「初音蒔絵旅香具箱」一式、「初音蒔絵書棚」二基、「胡蝶蒔絵書棚」一基の計六件の修理施工を、平成

国宝 初音蒔絵書棚 二基・胡蝶蒔絵書棚 一基の修理について

二十九年（二〇一七）から令和四年度（二〇二二）まで六か年度にわたり、国と愛知県よりの補助金に加え、住友財団の「文化財助成・修復事業助成」の補助を受けて実施した。六件のうち、「初音蒔絵見台」二基と「初音蒔絵旅香具箱」一式は、目白漆芸文化財研究所で行い、令和二年三月に修理が完了した。残る三件の「初音蒔絵書棚」二基・「胡蝶蒔絵書棚」一基は、大西漆芸修復スタジオ（代表 大西智洋氏 於…九州国立博物館内文化財保存修復施設6 漆工室および修復施設4）で行い、平成二十九年十一月に着工、令和五年三月に完了した。本稿では、「初音蒔絵書棚」二基・「胡蝶蒔絵書棚」一基の修理について、同スタジオによる詳細な修理報告書に基づき、以下に報告する。

一 書棚三基の概要と修理前の状況

国宝「婚礼調度類（徳川光友夫人千代姫所用）」計七十件は、寛永十六年（一六三九）三代將軍徳川家光の長女千代姫（一六三七～九八）が尾張徳川家初

代義直の嫡子光義（一六二五～一七〇〇）のち光友、尾張徳川家二代に嫁いだ際の婚礼調度で、「初音の調度」の名で親しまれている。「婚礼調度類」の内訳は、『源氏物語』第二十三帖「初音」に題材をとり、六条院の正月の情景をあらわしたなかに「年月をまつにひかれてふる人にけふ鶯の初音さかせよ」の和歌を筆手で散らした「初音蒔絵調度」四十七件、同じく第二十四帖「胡蝶」に基づき六条院の春の船樂をあらわした「胡蝶蒔絵調度」十件、その他の意匠の蒔絵調度や染織品、刀剣等十三件の計七十件で、平成八年に一括して国宝に指定された。このうち「初音蒔絵調度」および「胡蝶蒔絵調度」などの蒔絵調度は、室町幕府から江戸幕府に至るまでの政權に蒔絵師として仕えた幸阿弥家の十代長重（一五九九～一六五二）が手がけたことが史料から判明している。⁽²⁾精緻な文学的意匠もさることながら、総体梨子地仕上げで、高度な技術を要する高蒔絵や研出蒔絵に平蒔絵・切金・付描など様々な蒔絵技法が駆使されており、漆工史上、最高峰の蒔絵技術を示す名品として高く評価されている。

寛永十六年に千代姫が数え三歳で持参した婚礼調度は、千代姫の生前から、初音の輿・挟箱などが高須松平家に分譲され、元禄十一年（一六九八）十二月十日に千代姫が六十二歳で逝去した際にも、遺品の一部が將軍家や尾張徳川家をはじめとする親族に贈られた。⁽⁴⁾しかし、その他は「靈仙院様御道具」として十鈞（棹）の長持などにまとめられ、江戸から国許の尾張に移送された。⁽⁵⁾翌十二年五月十七日に名古屋に到着した遺品は、間もなく名古屋城内と尾張徳川家の菩提寺である建中寺（現・名古屋市中区）の宝蔵に納められたとみられる。このうち建中寺宝蔵に納められた遺品は、同十四年六月二十九日の奥書がある『靈仙院様御道具目録』（徳川美術館蔵）および江戸時代中期の『建中寺靈仙院道具目録』（徳川美術館蔵）から七十件あまりの

品目が判明する。⁽⁶⁾これらは明治六年（一八七三）に、建中寺から尾張徳川家に返還され、両目録に記載された品々のほぼすべてが国宝「婚礼調度類」として徳川美術館に現存していることが確認される。

千代姫の死後から明治時代初期まで厳格に保管された「初音蒔絵調度」「胡蝶蒔絵調度」などの蒔絵の漆工品は、今もなお漆特有の艶やかな器面の美しさがあり、同時代の伝存の漆工品と比較しても、格段に良好な保存状態を保っているように見える。しかし、子細に見ると、千代姫在世時の使用痕と思われる箇所や、江戸時代もしくは近代とみられる修理箇所がある。四百年近く歳月を経たことによる漆塗膜の劣化や汚れ、さらには木地収縮に伴って構造に弛みが生じ、亀裂や周辺塗膜の剥離・剥落が生じている箇所がある。とりわけ、「初音蒔絵書棚」二基・「胡蝶蒔絵書棚」一基は、漆の塗膜の劣化や、木地の収縮によって亀裂や段差が生じ、塗膜が剥離するなど危険な状態にあり、早急に修理を行う必要があった。

ここでは、まず作品の概要と修理前の状況を、書棚ごとに述べておく。なお、「初音蒔絵書棚」二件は同名で、棚囲いの意匠の違いにより、「七宝繫」「龍膽七宝繫」と区別できるものの、表記が煩雑となるため、胡蝶蒔絵書棚も含め、後述のとおり略称を用いた。

1、初音蒔絵書棚（七宝繫） 一基（以下、「初音書棚A」と略称する。挿図1） 作品の概要

所蔵番号 初音調度56
法量 高一〇・九匁 幅九二・二匁 奥行四六・一匁
天板があり、向かって左に棚板二枚（上段・下段）、右に棚板一枚（中段）、下部に地袋を設けて、引き戸の扉二枚が付く。棚板にはそれぞれ七宝繫を



挿図1 初音書棚A

あらわした囲いが付く。柱は花菱七宝繋文に葵紋を蒔絵であらわす。波に梅の折枝、葵紋を置いた銀製の隅金具が付く(挿図18)。天板には簀子に髭籠と結び文を付けた鶯と松の作り物を置いた春の御殿と、松が生え、梅の花が咲く池苑を蒔絵であらわし、明石の君が詠んだ和歌のうち「とし・月・を・に・ひ・かれ・て」の葦手文字を散らす。棚板中段には、室内に火取香炉、茵に琴を置いた明石の君の冬の御殿をあらわしたなかに「ふる・人・に」、上段には松に鶯、池苑をあらわしたなかに「け・ふ・乃」、下段には池苑のなかに「初音・きか・せよ」の葦手文字を散らして、和歌一首をあらわす。地袋天板には天板と同じ春の御殿を再びあらわし「年月・を・に」、地袋は池苑をバノラマのように連続させたなかに、時計回りです扉に「ひ・か・れ・て・ふる・人・に」、左側面に「け・ふ・の」、背面に「初音・き」、右側面に「か・せよ」と葦手文字を散らす。また各面に葵紋を

数個ずつ置く。

修理前の状況

- ・汚れ
地袋内や棚板など全体に汚れが付着していた。
- ・木地構造の弛み、亀裂
経年の木地収縮に伴い、木地接合部から弛みが生じ各所に亀裂が生じていた。その結果、構造上不安定な状態となり、亀裂、周辺塗膜の剥離・剥落が生じていた。特に、棚板上段(図1)と地袋内の敷居から框座・脚周りにかけての木地構造に大きな損傷が見られた(図3)。敷居がずれたことで、地袋の扉が完全に閉まらなくなっていた。
- ・塗膜剥離
亀裂箇所や打損箇所周辺塗膜で、剥離・剥落が生じていた。
- ・欠損
打損や木地接合部の弛みに伴い、欠損が見られた。
- ・擦れ
扉や敷居で擦れが見られ、下地が露出していた。
- ・隅金具の浮き
木地収縮に伴い、地袋正面の隅金具の先が接地面からわずかに離れてしまっていた。
- ・収納箱
書棚を納める外箱の内貼紙が剥がれていた。



挿図2 初音書棚B

2、初音時絵書棚(龍膽七宝繋) 一基(以下、「初音書棚B」と略称する。挿図2) 作品の概要

所蔵番号 初音調度58

法量 高一・一・五 幅九二・三 奥行四六・二

初音書棚Aと同様、天板があり、左に棚板二枚(上段・下段)、右に棚板一枚(中段)、下部に地袋を設けて、引き戸の扉二枚が付く形式で、隅金具は材質・意匠ともに同じ(挿図19)だが、棚板の囲いは龍膽七宝繋の意匠である。柱は花菱七宝繋文を時絵であらわすが、初音書棚Aと異なり、葵紋は付かない。天板に春の御殿、棚板中段に冬の御殿、地袋天板に春の御殿、地袋左側面に冬の御殿をあらわし、「年月の…」の和歌の葦手文字を二回繰り返して散らす。また各面に葵紋を数個ずつ置く。書棚三基のうち、初音書棚Bだけに、梅の花の表現に珊瑚が用いられている。また、葦

手文字も磨き上げられたようで、ひととき輝いている。

修理前の状況

・汚れ

全体に汚れがあることに加え、高時絵の周囲に汚れが付着していた。

これは一基目の初音書棚Aの修理では見られなかった汚れである(図5)。

・漆塗膜の劣化

部分的に梨子地漆塗膜の劣化が進行し、艶が失われていた。

・木地構造の弛み、亀裂

経年の木地収縮に伴い、木地接合部から弛みが生じ各所に亀裂が生じていた。その結果、構造上不安定な状態となり、周辺塗膜の剥離・剥落が生じていた。特に、棚板下段(図7)と地袋の敷居から框座・脚周りにかけての木地構造(図9)に大きな損傷が見られた。地袋内から観察すると背板にも亀裂が生じ、表面まで亀裂が生じている可能性があった。

・塗膜剥離

亀裂箇所や打損箇所周辺塗膜で、剥離・剥落が生じていた。

・欠損

打損や木地接合部の弛みに伴い、欠損が見られた。

・扉の擦れ、割れ

扉と敷居で擦れが見られ、下地が露出していた。また、扉に反りが生じ、割損が見られた。敷居で目違いが生じていることから、扉を完全に閉めるのが困難であった。

・隅金具の浮き

木地収縮に伴い、正面左下の隅金具の先が接地面から離れてしまつて

いた(図9)。

木地の亀裂箇所周辺の塗膜が剥落し、隅金具の裏で留まっていた。

・外箱

棚を納める外箱の扉で、木地の接合部に隙間が生じていた。

3、胡蝶蒔絵書棚 一基(以下、「胡蝶書棚」と略称する。挿図3)

作品の概要

所蔵番号 初音調度57

法量 高一・二・二 幅九一・二・二 奥行四五・五・五

初音書棚A・Bと同様、天板があり、左に棚板二枚(上段・下段)、右に棚板一枚(中段)、下部に地袋を設けて、引き戸の扉二枚が付く形式である。柱は七宝繫文が蒔絵であらわされるが、初音書棚Aと異なり、葵紋は付かな



挿図3 胡蝶書棚

国宝 初音蒔絵書棚二基・胡蝶蒔絵書棚一基の修理について

い。隅金具は銀製で、波に桜の折枝をあらわし、葵紋が付く(挿図20)。棚囲

いは透かしの部分が大きい七宝繫の意匠である。春爛漫、桜・山吹が咲き、水鳥が遊ぶ池苑を蒔絵であらわし、天板や各棚板、地袋の天板と扉・三側面のすべての器面に龍頭鷄首の船を配して、六条院の船樂をあらわす。

修理前の状況

・汚れ

全体に汚れが付着していた。

・漆塗膜の劣化

部分的に梨子地漆塗膜の劣化が進行し、艶が失われていた。

・木地構造の弛み、亀裂

経年の木地収縮に伴い、木地接合部から弛みが生じ各所に亀裂が生じていた。その結果、構造上不安定な状態となり、周辺塗膜の剥離・剥落が生じていた。特に、棚板中段(図11・13)・棚板下段、柱の付け根周りや囲いとの接合部(図15)、地袋の敷居から框座、脚周りの木地構造に大きな損傷が見られた(図17)。天板と支柱の接合部が外れた状態であった(図19)。

・塗膜剥離

亀裂箇所や打損箇所の周辺塗膜で、剥離・剥落が生じていた(図11・13)。地袋の扉でも亀裂や塗膜剥離が多く見られた。

・欠損

打損や木地接合部の弛みに伴い、欠損が見られた。

・隅金具の浮き

木地収縮に伴い、正面左下の隅金具の先が接地面から離れてしまっていた(図17)。

・その他

金貝の欠失が見られた。また、過去の修理で金貝が復元されている箇所や棚板上段、地袋内に亀裂箇所^{はしほめ}の補修が確認された。

・外箱

棚を納める外箱の扉で、木地の接合部に隙間が生じていた。

書棚三基の所見

書棚三基は、いずれも天板、棚板三枚が付き、下部に引き戸扉二枚が付いた地袋が設けられ、底部には畳擦が付く形態である。現状での各部材の寸法ともにほぼ同じといえる(表1)。製作時期と伝来を同じくするが、損傷の程度には違いがあった。汚れや擦れ・欠損、木地収縮に伴う木地構造の弛みや隅金具の浮き、塗膜剥離が共通して見られた一方で、損傷や汚れは一樣ではなく、初音書棚A・初音書棚B・胡蝶書棚の順で、損傷の数が多くなり、また損傷程度にも大きな差が確認された。

とりわけ初音書棚Bは、近代以降の意図的な古色付けと考えられる灰色の汚れが全体に付着し、特に高時絵や珊瑚の周辺に顕著であった。また胡蝶書棚は、棚板の亀裂と端嵌^{はしほめ}からの亀裂が多数あり、絵柄にかかる箇所の塗膜の剥離が著しかった。さらに過去に修理された箇所の漆の色味の違いが目立ち、美観を損ねていた。

二 修理方針

①事前調査

指定文化財漆工芸品保存修理の理念に則り、文化庁の指導のもと、現状

保存修理を原則とした。修理に際しては、目視による観察やX線CT・透過線撮影など充分に事前調査を行い、傷みの現状を確認した。

②修理工程の決定

修理に先立ち開催された修理方針検討会では、文化庁・多比羅菜美子氏、目白漆芸文化財研究所・室瀬和美氏(重要無形文化財「蒔絵」保持者)・室瀬智弥氏、漆芸家・松本達弥氏、北村工房・北村繁氏、九州国立博物館・川畑憲子氏、徳川美術館・四辻秀紀が参加し、書棚三基とX線CT・透過X線画像の確認を行った。

また、大西漆芸修復スタジオが所在する九州国立博物館内の文化財保存修復施設6(漆工室)には、書棚が入る大きさの漆風呂がなかったため、大型の漆風呂が新設された。書棚三基は、それぞれ損傷程度が異なるため、損傷が比較的軽微な初音書棚Aから、初音書棚B、胡蝶書棚の順で一基ずつ修理することとし、最終的に三基の仕上がりを合わせるための調整期間を設けた。一基ずつ修理する際、残りの二基は九州国立博物館内の収蔵庫内で適切に保管した。最終年度は三基の調整のため、これらを並べて修理が行うことのできる広い修復施設4へと場所を移した。

③情報共有

先述したように、目白漆芸文化財研究所と大西漆芸修復スタジオとで平行して修理作業を進めたため、旅香具箱と見台二基の修理を施工した目白漆芸文化財研究所と作業工程や材料等の情報共有を行った。さらに修理方針の確認やその他の調度品との仕上がりを合わせるために、室瀬和美氏を作業監督者として選任した。書棚が大型のため、要所で松本達弥氏と目白漆芸文化財研究所・鷺野谷一平氏が作業を補助した。修理中に発生する問題や新しい事態が発生し、修理方針を変更する際には、文化庁・大西漆芸

表1 法量比較

(単位はmm)

計測箇所	初音書棚 A	初音書棚 B	胡蝶書棚
総高	1109	1115	1112
棚板上段高	881	888	881
棚板中段高	685	690	683
棚板下段高	541	544	540
地袋天板高	344	346	343
地袋底板高	70	70	70
天板幅(隅金具)	920	921	921
天板幅(木地)	916	917	916
天板奥(隅金具)	461	461	461
天板奥(木地)	456	456	456
天板厚(木地)	17	19	19
棚板上段幅(隅金具)	485	488	485
棚板上段幅(木地)	481	484	480
棚板上段奥(隅金具)	460	457	461
棚板上段奥(木地)	456	453	456
棚板上段厚	16	16	16
棚板中段幅(隅金具)	485	484	489
棚板中段幅(木地)	481	480	485
棚板中段奥(隅金具)	461	461	458
棚板中段奥(木地)	456	456	453
棚板中段厚	16	16	16
棚板下段幅(隅金具)	484	484	488
棚板下段幅(木地)	480	480	484
棚板下段奥(隅金具)	460	461	458
棚板下段奥(木地)	456	457	453
棚板下段厚	16	16	16
地袋天板幅(隅金具)	919	920	921
地袋天板幅(木地)	915	916	916
地袋天板奥(隅金具)	460	461	460
地袋天板奥(木地)	456	457	456
地袋天板厚	17	17	17
地袋底板幅(隅金具)	922	922	922
地袋底板幅(木地)	917	917	917
地袋底板奥(隅金具)	461	461	461
地袋底板奥(木地)	456	456	456
地袋底板厚	17	17	17
畳擦幅(隅金具)	928	929	928
畳擦幅(木地)	923	923	923
畳擦奥(隅金具)	466	469	467
畳擦奥(木地)	461	464	461
畳擦厚	20	20	20.5
支柱幅	24.5	25.5	26
支柱奥	24.5	25.5	26
支柱高(天板－棚板上段)	211	214	211

支柱高(棚板上段－棚板下段)	323	324	324
支柱高(棚板下段－地袋天板)	180	182	180
海老束(棚板上段－棚板中段)	180	181	180
海老束(棚板中段－棚板下段)	125	129	127
海老束(棚板下段－地袋天板)	180	180	181
支柱高(天板－棚板中段)	410	410	410
支柱高(棚板中段－地袋天板)	323	325	324
脚高(地袋底板－畳擦)	33	32	32
脚の幅・奥(畳擦面)	38×38	38×38	38×38
棚囲い高	(金具まで) 46	45	46
棚囲い厚	(本体) 7 (金具) 8	8	8
扉幅	435	434	433
扉高	257	258	253
扉厚	10	8	9
木地のやせ	(畳擦正面) 1弱	(地袋底板) 1.5	(棚板中段、下段、地袋底板) 2

修復スタジオ・徳川美術館の三者に加え、室瀬・松本両氏と十分に協議しながら対応した。

④修理報告書の作成

施工の際には、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにした。修理終了後には報告書を作成し、徳川美術館に提出することとした。

三 初音書棚Aの修理

初音書棚Aの保存修理は、平成二十九年十一月三十日より同三十一年三月二十二日まで、九州国立博物館内文化財保存修復施設6(漆工室)において行われた。

修理工程

修理作業は以下の工程で行った。

①作業台の製作

作業台を製作し、安全に調査・修理作業を行える準備を整えた。

②作業監督と打ち合わせ

修理方針検討会では、X線CT(挿図4)^⑦・透過X線調査(挿図5)による事前調査で判明した内容と現状の作品を見比べ、改めて修理処置箇所と処置内容を検討した。

③修理前写真撮影・記録

修理前に写真撮影を行い、現状を記録した。

④一次クリーニング

クリーニング作業では、漆塗膜に傷が入らないように柔らかい毛棒で塵や汚れを払い落とし(挿図6)。漆塗膜に付着しているカビ汚れは、柔らかい木綿布と綿棒に極少量の水分を含ませ、少しずつ拭きとりながら除去作業を行った。表面の白色化したカビ汚れは可能な限り除去を行ったが、

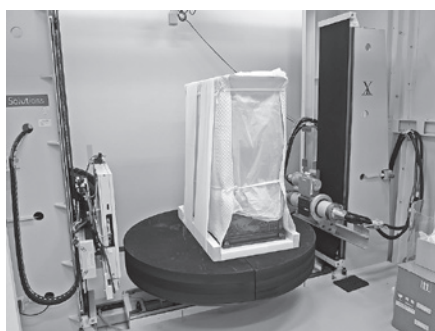
国宝 初音時絵書棚 二基・胡蝶時絵書棚 一基の修理について



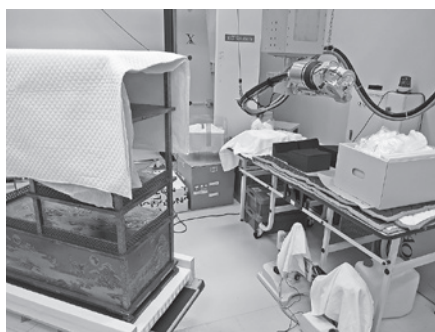
挿図6 クリーニング



挿図7 天板 梨子地部の漆固め



挿図4 X線CT調査風景(九州国立博物館内)



挿図5 透過X線調査風景(九州国立博物館内)

漆塗膜上に時代を感じさせる経年の汚れが残されていることから、必要以上クリーニング作業は行わないこととした。金地部に銀の錆(錆が浸食した状態)が見られるが、除去は行わず現状のままとした。

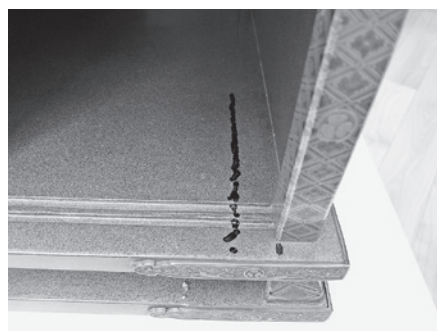
⑤ 漆固め

梨子地漆塗膜は、経年の劣化により本来の艶を失っている状態にあったため、漆塗膜を強化する目的とあわせて、透漆を溶剤で希釈して塗布、その後拭き取り、乾燥固化させる漆固めを行って塗膜の強化を図った(挿図7)。なお、事前に梨子地漆と素黒目漆で調整をした透きと乾燥固化がよい漆を調整し、目立たない箇所(箇所)に漆固めのテストを実施した。結果は色調や乾燥固化も問題なく、クリーニングの目途がつき次第、漆固めを実施した。

⑥ 金貝の膠接着

剥離した金貝は膠で接着を行った。

⑦ 構造安定処置



挿図8 木地構造接合部、亀裂箇所に麦漆含浸



挿図9 刻苧充填

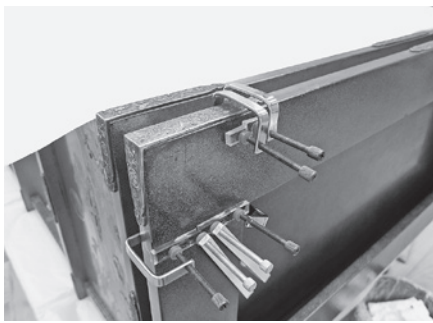
本地構造接合部からの亀裂に対し、麦漆⁽⁸⁾を溶剤で希釈して含浸させ構造安定処置を行った(挿図8)。また、周辺塗膜の浮きに対しても同時に塗膜下に麦漆を含浸させて圧着固定し、塗膜の安定処置を行った。刻苧⁽⁹⁾が入らない狭い亀裂には、充填接着用に調合した麦漆を含浸させて接着安定処置を行った。

⑧刻苧充填

棚板の亀裂箇所刻苧を充填した(挿図9)。その際に、目違いが生じないようにクランプで挟み込み、固定した上で充填作業を行った。

⑨底裏および棚板裏の処置(クリーニング・構造安定処置・塗膜接着・刻苧充填・下地付け・仕上げ作業)

書棚を寝かせて損傷箇所を確認した上で、底裏のクリーニング、本地構造接合部の構造安定処置を実施した。本地構造接合部の亀裂箇所より麦漆を含浸させ、クランプで圧着固定した(挿図10)。亀裂・打損箇所周辺の漆塗膜を圧着する際、飛び出た漆塗膜は、わずかに切除し平滑にした上で接



挿図10 底裏の本地構造接合部 麦漆の含浸後、クランプで圧着固定



挿図11 刻苧箇所に漆下地付け作業

着した。亀裂箇所の麦漆固化後、亀裂の隙間に刻苧を充填し、漆下地⁽¹⁰⁾を付け、仕上げ作業を行った。同様に、棚板裏の亀裂に対し、麦漆の含浸・刻苧の充填、漆下地付けをし、仕上げ作業を実施した。

⑩漆下地付け・仕上げ

底裏と棚板裏の処置が完了したところで、書棚を元のように立たせた上で全体の仕上げ作業を実施した。

打損箇所とその周辺塗膜、亀裂箇所に麦漆を含浸させ、麦漆固化後、亀裂の隙間に刻苧の充填と漆下地付けをし、塗膜の接着安定処置を行った(挿図11)。

⑪外箱の修繕

外箱の埃を払い、柔らかい木綿布で水拭きを実施した。剥がれていた内貼紙は糊で接着を行った。

⑫修理後写真撮影・記録

⑬作業監督・点検・検討会

⑭報告書作成

修理による所見

X線CT・透過X線調査では、本地構造内部の損傷については表面に現れている亀裂等の損傷と一致し、特に内部構造で甚大な損傷が生じていないことがわかった。なお、書棚の柱が心材を通した二重構造であることが確認され、製作技法として興味深い構造であることが判明した(詳細は七章にて後述する)。

過去に修理は行われていないようである。棚板において、梅の枝に赤い印が付けられているが、後補ではなく製作当初の目印の可能性が考えられ

る。

剥落塗膜や金貝をデジタルマイクロスコープで調査した。金貝についてはクリーニング時に剥落したものを、調査後に元の位置に膠で接着をした。

四 初音書棚Bの修理

初音書棚Bの保存修理は、平成三十一年四月十五日より令和二年十月二十二日まで九州国立博物館内文化財保存修復施設6(漆工室)において行われた。

修理工程

修理工程は、先に施工した初音書棚Aと共通する部分も多いため、重複する作業の詳細は割愛し、異なる作業内容について以下に述べる。

- ①作業監督と打ち合わせ
- ②事前調査・作業準備
- ③修理前写真撮影・記録
- ④一次クリーニング

漆塗膜の塵や汚れ、漆塗膜に付着したカビ汚れ、棚囲いの埃の除去作業を、初音書棚Aと同様に行った。初音書棚Bには、過去に意図的に付けられたと考えられる灰色の汚れが全面に確認され、とくに蒔絵や珊瑚の際に多く付着していた。固く付着しているため、作品に傷が入らないように慎重に除去を行った。汚れが溜まり固まっている箇所には、水分を与えたのちへらで崩してから綿棒などで除去を行った。



挿図12 取り外した隅金具

⑦構造安定処置

木地構造接合部からの亀裂箇所は、充填接着用の麦漆を溶剤で希釈して含浸させ、構造の安定処置を行った。棚の割れや地袋内の隙間が大きな箇所には、麦漆に木粉等を加えた充填用の接着剤を使用して構造安定処置を行った。

⑧底裏と棚板裏の処置(クリーニング・構造安定処置・塗膜接着・刻字充填・下地付け・仕上げ作業)

書棚を寝かせ、底裏の修理処置を実施した。底裏のクリーニング後、木地構造接合部からの亀裂箇所に対し、麦漆を溶剤で希釈して含浸させ構造安定処置を行った。亀裂箇所や打損部周辺の剥離塗膜は、塗膜接着用に調合した麦漆を使用して接着安定処置を行った。欠損部に刻字を充填し形体を復元し、黒色の漆下地をつけて表面を平滑にして仕上げた。

寝かせた状態で作業がしやすい地袋内・框部・棚板裏・扉などの亀裂箇所も、構造安定処置や塗膜接着作業など底裏同様の修理処置を実施した。

⑤金貝・珊瑚の膠接着

④のクリーニングを行いながら、金貝の浮きや珊瑚の取れた箇所に対し、その都度、膠で接着安定処置を行った。

⑥正面左の隅金具の取り外し・歪みの調整

慎重に隅金具を取り外し(挿図12)、隅金具の側面側の変形を修繕した。隅金具の隙間に引っかけていた剥落片は、調査後に元の位置に接着を行った。

⑨ 天板と支柱の接着

書棚を寝かせた際、天板と支柱の接合部四箇所のうち三箇所を外れていることがわかった。元の状態に立たせてから、外れている箇所を麦漆で再接着を行った。

⑩ 塗膜接着

木地構造の亀裂部や欠損部周辺の塗膜が剥離しているため、塗膜接着用に調合した麦漆で接着を行った。地袋内の左右亀裂箇所では塗膜が浮いた箇所については、木地収縮によって現状では塗膜を元の位置に収めることができないため、わずかではあるが塗膜と下地を削って収めた。

⑪ 刻苧充填

欠損部に刻苧の充填を行い、形体の復元を行った。

⑫ 漆下地付け

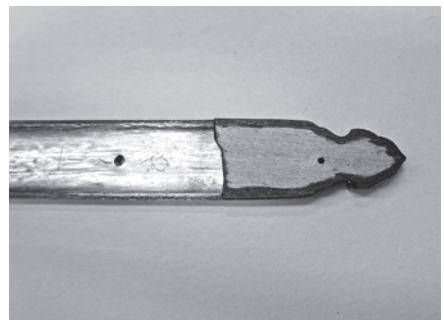
刻苧箇所には漆下地を付けて表面の肌を整えた。欠損部と周辺漆塗膜との段差を緩和し触手による剥落を防止するため、塗膜際に極少量の漆下地を付けた。

⑬ 漆固め

地袋の扉・敷居・鴨居の擦れた箇所に対し、漆固めを実施した。また、敷居は木地まで露出して擦れが目立っていたため、木地部分は再度黒漆で漆固めを行い、色調が黒くなるように調整した。

⑭ 正面左下の隅金具の取り付け

釘は折れずに取り外すことができたため、釘穴を埋めたのちに釘を再利用して隅金具を打ち止めた。木地収縮で隅金具先にできた隙間に合わせて朴の薄材を作製した(挿図13)。薄材は黒漆(生漆と硝煙)を塗って色合わせをし、隅金具とともに釘だけで固定して取り付け、梱包時や触手によって



挿図13 加工した木片

に劣化が進行していたため三回の漆固めを実施し、棚板は二回、扉と立ち面は一回の漆固めを実施して、艶の回復と全体の質感を統一させるように処置した。

⑰ 漆下地付け・仕上げ

⑱ 扉の開閉調整

地袋の左扉の開閉の動きを改善するため、鴨居と扉上部の擦れている箇所を確認し、黒名倉砥石による最小限の研ぎ落としを実施した。チタニウムホワイトを水で溶いたものを塗布して鴨居との接触部分を確認し、擦れる後補箇所を砥石で少しずつ研ぎ落としした。

⑲ 外箱の修繕

クリーニングでは埃を払い、水拭きを実施した。カビ汚れが目立つ箇所は、アルコールを使用して除去を行った。

箱内の下部で、車輪付きの受け台が当たって内貼紙が剥がれていたため、糊で接着を行った。また、受け台の車輪と側面が当たり木地が露出し

引っかかりないように対処した。

⑮ 二次クリーニング

一次クリーニングで全体の汚れを除去した後、珊瑚や高蒔絵の際に意図的に付けられたと思われる汚れに対し、再度可能な限り除去を行った。

⑯ 劣化した梨子地漆塗膜の漆固め

クリーニング後、天板・棚板・扉・立ち面の梨子地漆塗膜で、劣化が目立つ箇所に漆固めを実施した。天板は特

ている箇所は、漆固めを実施して木の粉が落ちないように補強を行った。

扉の割れ部分には檜の薄材を入れ、麦漆で接着を行った。檜部分は漆固めを行い、外箱の色調に合わせた。

⑳修理後写真撮影・記録

㉑作業監督・点検・検討会

㉒報告書作成

修理による所見

X線CT・透過X線調査では初音書棚Aと同様、木地構造内部の損傷については表面に現れている亀裂等の損傷と一致し、特に内部構造で甚大な損傷が生じていないことがわかった。また、柱構造も心材を通した二重構造であることが確認された(詳細は七章で後述する)。

灰色の汚れが全面に見られ、蒔絵や珊瑚の際に多く付着していたが、これは古色を意図的に付けたと考えられる。粒子が細かく、漆下地で使用されるような下地材料と思われるが、幸いに漆と混合していなかったようである。隅に溜まっていた汚れは水拭きである程度除去ができた。しかし、蒔絵部分の上に薄く付着している汚れは水拭きでの除去は困難であり、完全に取除くことはできなかった。

梨子地漆塗膜のうち天板の劣化が著しく、過去に外箱から出され、光に当たるとような環境下で長期間管理されていたことが考えられる。

扉の開閉に支障があり、扉の擦れていた箇所は、裏面の後補修理箇所が盛り上がっていたことが一因であった。また、後補箇所の木地に割れが生じており、扉を取り外す際に負荷がかかり割れたと思われる。そのため、開閉の動きと共に取り外す際にも鴨居との接点で負荷がかかる箇所を把握

する必要があった。扉を取り外す位置の目安として、左扉は支柱から十五糎離れたところから取り外し、右扉は支柱から四糎離れたところが大きな負荷がかからず出し入れすることが可能なため、今後はこの位置で取り外しを行うことが望ましい。

正面左下の隅金具の隙間に引っかかっていた塗膜片は、デジタルマイクロスコップで調査を行った上で元の位置に接着した。塗膜片の裏面からは繊維や黒色の塊、布貼りが確認された(図21～26)。

過去の修理で、底裏の打損部に対して白色系の下地が施されていたことが判明した。下地が固いことから、漆以外の合成樹脂かと思われる。除去作業を行うには刃物を使用した物理的な除去が必要で、漆塗膜を傷付けてしまう可能性が高い。検討会では、取り除かなくても底裏で見える箇所ではなく、変質して作品に影響を与えるような材料ではないと考えられることから、無理に除去は行わず現状のままとした。

五 胡蝶書棚の修理

胡蝶書棚の保存修理は、令和二年十月二十三日より、同四年三月十五日まで九州国立博物館内文化財保存修復施設6(漆工室)において行われた。

修理工程

前章同様、修理工程は、先に施工した初音書棚A・Bと共通するため、重複する作業の詳細は割愛し、異なる作業内容について以下に述べる。

①作業監督と打ち合わせ

②事前調査・作業準備

③修理前写真撮影・記録

④一次クリーニング

書棚を寝かせて行ったクリーニングで、底裏に生じたカビが見つかったため、除去と共に九州国立博物館に調査を依頼した。

⑤金貝の膠接着

⑥漆固め

⑦構造安定処置

胡蝶書棚は構造の弛みや損傷が多いため、天板や棚の重量が地袋内で受けられるようにスタイロフォームを加工して設置した。

正面左下の二つの隅金具は、隙間や変形が生じているため、釘を抜いて隅金具を取り外し、そのうち曲がった状態で打ち付けられていた釘（後補の釘で隅金具の穴よりも太い）の形を修正した。構造安定処置後に緩くなった釘穴を埋木し、本地収縮で隅金具先にできた隙間に合わせて朴の薄材を製作した。薄材は黒漆（生漆と硝煙）を塗って色合わせをし、隅金具とともに釘だけで固定して取り付けた二つの隅金具のうち、底面に接した隅金具は、⑧書棚を寝かせての作業時に行った。

⑧底裏と棚板裏の処置（クリーニング・構造安定処置・塗膜接着・刻苧充填・下地付け・仕上げ作業）

⑨塗膜接着

本地構造の亀裂部や欠損部周辺の塗膜が剥離しているため、塗膜接着用に調合した麦漆を溶剤で希釈して接着を行った。端嵌からの亀裂と塗膜剥離箇所は、塗膜を調整した後、麦漆で含浸させ、クランプで圧着固定した。なお、クランプを用いる際、裏の塗膜に触れないよう治具を製作して圧着した。そのほか、塗膜接着には竹ひごを用いて圧着固定した。

⑩刻苧充填

棚囲いの接合部隙間、地袋内の正面左側の亀裂箇所などに刻苧を充填した。

⑪漆下地付け

⑫漆固め・仕上げ

⑬二次クリーニング

⑭外箱の修繕

外箱の背面と扉裏で、本地が収縮し隙間が生じている部分に紙が貼られていた。箱背面の紙は破れているため本地の隙間を埋めることとしたが、扉は紙が健常であり構造も安定しているため現状のままとした。

隅金具と鉄釘は後補のもので、四箇所まで釘が外箱の内側に貫通していた。三箇所は釘先を切り落とし、一箇所は釘先を横から叩いて折り曲げ、引っかからないように処置した。

⑮作業監督・点検・検討会

⑯修理後写真撮影・記録

⑰報告書作成

修理による所見

X線CT・透過X線調査では、本地構造内部の損傷については表面に見れている亀裂等の損傷と一致し、特に内部構造で甚大な損傷が生じていないことがわかった。三基の書棚のうち、胡蝶書棚が最も損傷が激しかった。経年の乾燥などによる本地収縮によって亀裂や塗膜剥離が多数生じており、特に棚板や地袋において顕著であった。過去にも亀裂や塗膜剥離に対し修理が行われたと考えられ、上段の棚板や地袋内における修理箇所

は、漆の色味の違いが目立っていたが、過去の修理箇所を除去することも困難なため、除去は行わず、現状のままとした。

初音書棚A・Bに比べ、木地や見えないところでの下地・漆塗りに差が見られた。X線CT調査では、柱構造に心材を通した二重構造であることが確認されたが、胡蝶書棚は支柱の構造に隙間が生じていることがわかり、初音書棚A・Bよりも加工精度に粗さが見られた(詳細は七章で後述する)。

六 書棚三基の調整

初音書棚A・B、胡蝶書棚は、九州国立博物館内文化財保存修復施設4へと場所を移し、令和四年四月十五日から同五年三月八日まで最終的な仕上りの調整が行われた。

修理工程

①作業監督と打ち合わせ

②事前調査・作業準備

書棚三基を収蔵庫と文化財保存修復施設6から、文化財保存修復施設4へ移動した。事前に修復施設4に外光が入らないよう遮光カーテンの設置工事を施工した。

③写真撮影・記録

④クリーニング

書棚三基のクリーニングを実施し、主に古色が施されていた初音書棚Bを処置した。水と綿棒で除去作業を行っていたが、汚れが容易に取れない

箇所は、当たりが軟らかい木材(クロモジ)や象牙のヘラで擦って除去作業を行った。

クリーニング作業を実施中、初音書棚Bの天板で、珊瑚一箇所、銀の梅花一箇所が脱落した。どちらともデジタルマイクロスコープで調査を行った後、元の位置で膠接着を行った。

⑤漆固め

初音書棚Bと胡蝶書棚の天板において、梨子地漆塗膜に漆固めを再度実施した。最終的に天板の漆固めは、初音書棚Bは四回、胡蝶書棚は三回実施をして艶の回復を行った。

⑥作業監督の確認・全体との調整

修理監督(最終確認)を実施し、仕上げのクリーニングと漆固め後の状況を確認した上で、完了とした。

⑦修理後写真撮影・記録

⑧梱包、輸送返却、点検

梱包作業して作品輸送を行った。令和五年三月十日に徳川美術館に到着後に、徳川美術館の学芸員と愛知県民文化局文化庁文化芸術課文化財室の担当官が立会い点検を行った。書棚の扉の開閉、取り外し位置を確認した後、引き渡しを行った。

⑨報告書作成

修理による所見

修理を終えた書棚三基は、ともに汚れを除去したことで、全体的に明るくなり、蒔絵表現が鮮明になった。劣化した漆塗膜に対し漆固めを実施したため、漆工品特有の艶が回復された(図6)。構造的に不安定だった亀裂

箇所は、刻苧などで埋め、また天板と支柱の接合部を麦漆で接着させることで安定させ(図20)、また塗膜が浮いていた箇所を平滑に戻したことににより、展示や梱包の際、梱包材や触手等でも引っかかりがないように改善された(図2・4・8・10・12・14・16・18)。

重量がかかる底裏の構造も安定し、擦り傷や欠損部を補強・復元を行ったことにより、展示の際にも目立たないようになった。

七 修理による新知見

六か年度にわたる書棚三基の修理では、その過程でさまざまな知見が得られた。大西漆芸修復スタジオによる修理報告書および文化財保存修復学会における大西智洋氏による口頭発表⁽¹⁾に基づき、次に述べていきたい。

書棚三基の仕様の違い

書棚三基は、いずれも上部に天板、棚板三段がつき、下部に引き戸扉が付いた地袋が設けられ、底部には畳擦が付く形態である。しかし、細部においては、地袋の扉板の構造に違いがあることが確認された。扉の鴨居と敷居にかかる彫り込みが、初音書棚Aは扉の裏面側である(挿図14)のに対し、初音書棚B・胡蝶書棚は表面側であった(挿図15・16)。

現状での部材の寸法もほとんど同じだが、天板の厚み、支柱の太さ、棚囲いの厚みには数耗程度、寸法に差があった(表1)。経年の乾燥などによる木地収縮は、初音書棚Aの畳擦正面で一耗弱であるのに対し、初音書棚Bは地袋底板で一・五耗、胡蝶書棚は右二段・左三段の棚板、地袋底板で二耗であり、胡蝶書棚がもっとも顕著であった。



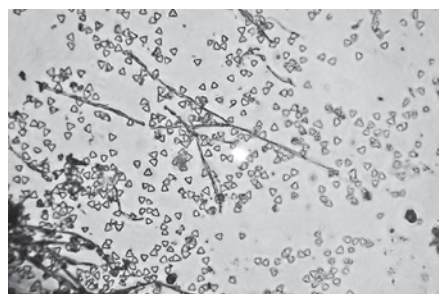
挿図14 初音書棚A 扉板の構造
上下の彫込みが他の書棚と逆である。



挿図15 初音書棚B 扉板の構造



挿図16 胡蝶書棚 扉板の構造



挿図17 胡蝶書棚 底裏のカビ(顕微鏡写真)
画像提供：九州国立博物館
木川りか氏

また、普段、見るこのできない底裏と畳擦の仕上げには、顕著な差が確認できた。初音書棚Aは、底裏と畳擦ともに、漆塗りに金粉の地蒔きが施されて加飾が行われていた(図27)が、畳擦の裏側は、蒔絵や漆塗りが施されていない木地のままであった。

初音書棚Bの底裏と畳擦は、黒漆塗りによる仕上げである(図28)。胡蝶書棚は畳擦が黒漆塗りだが、底裏は板目材に節の入った木目が見えることから、下地付けが省略され、木地に黒漆が塗られただけと考えられる(図29)。

また胡蝶書棚だけに、底裏に黄色いカビが生じていた。九州国立博物

館の木川りか氏の調査報告によれば、カビは三角形の形状であった(挿図17)。文化財に発生するカビの中では珍しく、報告例が少ないBalanopsis triangularisの可能性が高い。胡蝶書棚のみ、特異なカビが発生した原因は、その底裏に黒漆が塗られているとはいえず、木目が見えるほど漆塗膜が薄いことにより、木材の吸湿がより大きく生じたためと考えられる。

こうした仕様の違いによるためか、初音書棚A・初音書棚B・胡蝶書棚の順で損傷の数や程度がより大きくなっていた。とくに初音書棚Bと胡蝶書棚は木地の収縮が一・五〜二耗と大きかったため、棚板の割れや亀裂や塗膜剥離が著しく、後補修理の痕跡も確認された。また正面左下に付く隅金具先の浮きが著しかった(図9・17)。

なお、隅金具は、その取り付け位置や数は三基とも共通しているが、初音書棚Aに比べ、初音書棚Bと胡蝶書棚の隅金具は二割程度、長さが短い(挿図18〜20)。

修理前に行ったX線CT・透過X線調査で、違い棚板の支柱の木地構造



挿図18 初音書棚A 隅金具



挿図19 初音書棚B 隅金具



挿図20 胡蝶書棚 隅金具

を確認したところ、いずれも支柱のなかに心棒を通した二重構造であることが確認された(参考図・挿図21〜29)。心棒は違い棚上段から地袋の天板まで通るのに対し、蒔絵が施された外側の柱は棚板間の長さで調整されていた。かつ樹種の違う木材を組み合わせており、木目から心棒は密度の高い広葉樹、外側の柱は針葉樹とみなされる。柱は、心棒が通る穴をコの字型に彫り込み、残る一辺に別材を貼り付けた構造であった(挿図30・31)。こうした木地構造は三基で共通しているが、加工精度に差があり、初音書棚Aは柱と心棒の間に隙間はほとんどない(挿図27)のに対し、初音書棚B(挿図28)と胡蝶書棚(挿図29)は隙間が多く、その間を麦漆とみられる接着剤で充填していた。また使用される木材も、前者は目が詰んでいるのに対し、後者の二基は年輪幅が広いことが確認された。

以上のように、書棚三基は統一した構造・技法で製作されているが、細部で加工精度の違いがあったことが確認された。すなわち初音書棚Aは木地の加工精度が高く、目の詰んだ木材を使用していることで木地収縮が少なく済み、損傷が軽微であったと考えられ、過去に修理された痕跡もなかった。一方、初音書棚Bと胡蝶書棚は、木地の加工精度がやや粗く、年輪幅の広い木材や板目材を使用していたことから、木地収縮が大きくなったと考えられ、木地構造の損傷が多く確認された。

X線CTによる木地構造確認



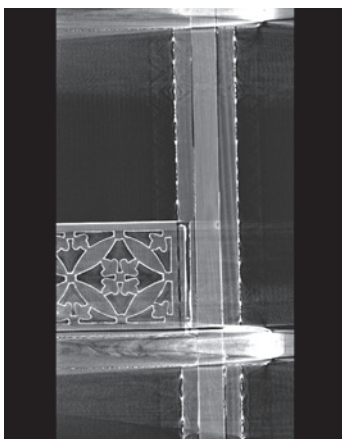
- ① 違い棚板の支柱
- ② 支柱と地袋天板
- ③ 支柱断面(天板より6cm上)

計測箇所 参考図

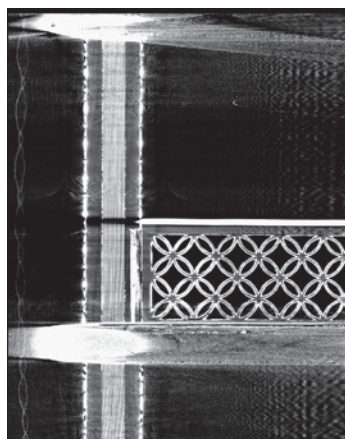
国宝 初音時絵書棚 二基・胡蝶時絵書棚 一基の修理について



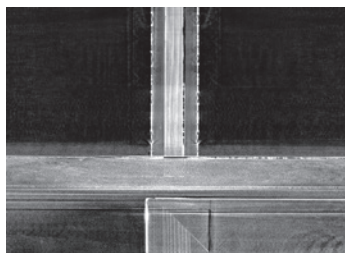
挿図23 胡蝶書棚①



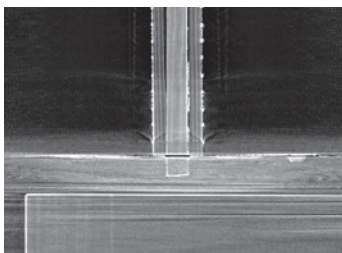
挿図22 初音書棚B①



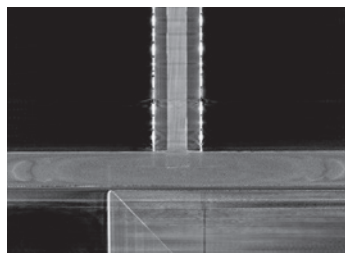
挿図21 初音書棚A①



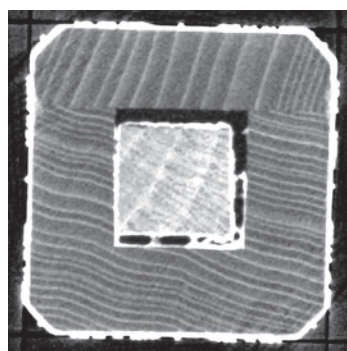
挿図26 胡蝶書棚②



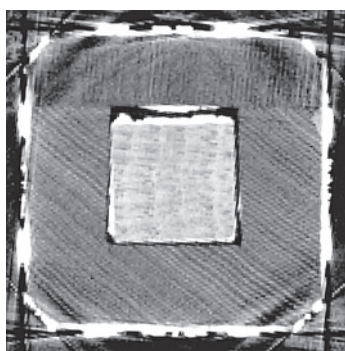
挿図25 初音書棚B②



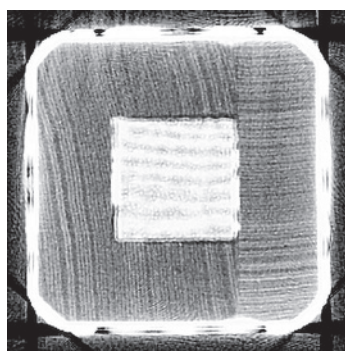
挿図24 初音書棚A②



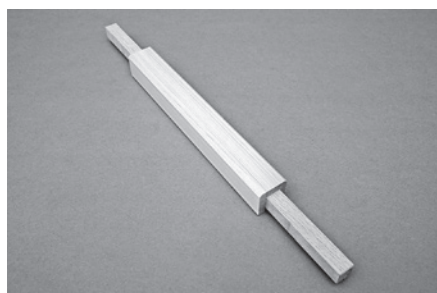
挿図29 胡蝶書棚③



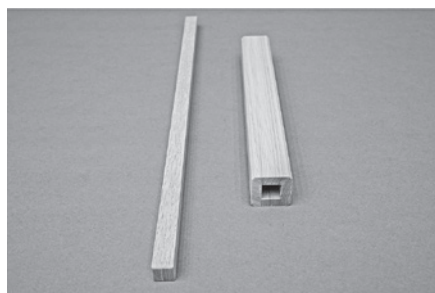
挿図28 初音書棚B③



挿図27 初音書棚A③



挿図31 支柱模型②



挿図30 支柱模型①

初音書棚Bの特記事項

書棚三基のうち、初音書棚Bのみ、珊瑚の加飾がある。珊瑚の剥落した箇所から、珊瑚は赤色の接着剤で貼り付けてあることが確認された。この接着剤は、水を含ませた綿棒でテストしたところ、溶解は見られなかったことから、水溶性ではなく、麦漆に顔料を混合したもので接着を行ったかとみられる。

また、初音書棚Bのみ、近代以降の古色付けとされる灰色の汚れが付着していたことが特筆される。明治六年（一八七三）に建中寺から尾張徳川家に千代姫の遺品が一括して返還された後、初音蒔絵調度は度々、展覧に供された。早くも同十一年に名古屋門前町の総見寺境内で開催された「愛知県博覧会」に厨子棚・黒棚・書棚の初音蒔絵三棚が出品、同二十三年に東京上野公園内桜ヶ岡美術協会列品館で開催された第十回美術展覧会に「蒔絵初音之棚三箇」が出品された。⁽¹³⁾ 大正四年（一九一五）には名古屋大曾根邸で園遊会が開かれた際に展覧会が催され、初音調度五十二点のほか、さらに中奥の間には「書棚 源氏初音の巻」が展示された。⁽¹⁴⁾ 以上が近代以降で確認できた出品履歴だが、初音の調度のなかでも、大きく見栄えのする厨子棚・黒棚・書棚の三棚は、出品の機会が多かったと考えられる。また三棚で出品される際には書棚三基のうち、厨子棚・黒棚ともに珊瑚の加飾があることに合わせ、珊瑚の加飾のある初音書棚Bが出品されていた可能性が高い。こうした出品の過程で、初音書棚Bに古色が付けられたと考えられるが、厨子棚・黒棚には古色付けは確認できず、書棚三基に比べ保存状態もよいため、出品に臨んでの古色付けと結論づけることは難しい。

胡蝶書棚の特記事項

胡蝶書棚では、銀で表現された桜花の加飾が各所に用いられている点の特筆される。この加飾は、初音時絵調度に用いられる銀の梅花と同様、銀無垢による彫金貼付と考えられてきた。しかし、今回の修理で、天板の中央手前で桜花の銀板が欠損し、接着剤が露わになっている箇所が確認された(図30)。接着剤は花の形を残しており、少し厚みがあつて硬い。したがつて、桜花形に型押しした銀板を何らかの接着剤で、充填接着のようにして貼り付けたのではないかと推測される。銀無垢にするよりも銀の使用量を少なくするための加工と考えられるが、漆工技法では確認されていない加飾技法であり、金工技法において同様の技法がないか、検討の余地がある。この銀の加飾では、桜花の連なりのなかに同じ型によると考えられる表現が数種類あることが大西漆芸スタジオより指摘された。

また、銀の色味の違いから、過去の修理で復元されたとみられる箇所がある(図31・32)。この復元も表現の違いから二種類に分けられ、それぞれ復元時期が異なると考えられる。

おわりに

修理を終えた書棚三基は令和五年(二〇二三)三月十日に返納された後、それぞれ外箱に収め、徳川美術館の収蔵庫に格納された。同年三月二十八日から五月二十三日まで、修理の完了を記念して同館名品コレクション第五展示室で書棚三基を、修理工程を示した写真パネルとともに特別公開した。今後も名品コレクション展示室で、順次、大名家の奥道具を代表する作品として展示していく予定である。すでに開館九十周年にあたる令和七

年には、初音の調度の全点を特別公開する展覧会を企画している。また、そのほかの特別展・企画展での展示や他館の展覧会への貸出等に活用していく予定である。

最後に、長期間に及ぶ修理施工にご尽力いただいた大西漆芸修復スタジオの大西智洋氏・後藤里架氏をはじめ、目白漆芸文化財研究所の室瀬和美氏・室瀬智弥氏・鷲野谷一平氏、漆芸家の松本達弥氏、修理方針を決定する上でご助言・ご指導いただいた北村工房・北村繁氏、作品保管や修復施設の環境整備、科学的調査にご配慮・ご協力いただいた九州国立博物館の川畑憲子氏・志賀智史氏・木川りか氏・渡辺祐基氏ほかの方々、国庫補助事業を円滑に進めるにあたり、ご指導いただいた文化庁の伊東哲夫氏・多比羅菜美子氏や愛知県・名古屋市の関係各所の方々、さらには助成をいただいた住友財団に対し、この場を借りて感謝申し上げます次第である。

註

- (1) 吉川美穂「〔修理報告〕 国宝 初音時絵見台 二基・旅香具箱 一式の修理について」(『金鯢叢書』四八、徳川黎明会、二〇二一年)。
- (2) 初音時絵調度が幸阿弥家十代長重によって製作されたことは、『幸阿弥家傳書』(『幸阿弥家傳書 幸阿弥家傳卷』『美術研究』九八、美術研究所、一九四〇年)、『幸阿弥家記』(鈴木規夫「幸阿弥家記 幸阿弥家蒔絵品目」『漆工史』五、漆工史学会、一九八二年)の幸阿弥家側の記録で確認される。
- (3) 「東照宮御譲之御武器并御由緒有之御武器其他御道具類」(什器古帳第五十七号、徳川美術館蔵)によれば、延宝七年(一六七九)十一月二十五日に初音の輿・挟箱・文箱・硯箱などが尾張徳川家の分家・高須松平家に分譲されていたことが記される。
- (4) 元禄十一年(一六九八)十二月二十九日に五代將軍綱吉に「古今集」「千載集」、御台所の信子に「墨絵源氏」や琴などが(秦心院様公辺御日記)・「事蹟録」と

もに徳川林政史研究所蔵)、また翌十二年正月二十七日に夫・光友に掛物や書棚、屏風などの遺品が贈られた(「事蹟録」)。

- (5) 千代姫は、長らく江戸の上屋敷である市谷邸を住まいとしていたが、逝去した当時は戸山邸に在住していた。江戸での初音の調度の保管場所は判明しないものの、「事蹟録」元禄十二年五月十七日条に左記の記事がある。

尾州

一 靈仙院様御道具十釣到着、右御道具建中寺ニ

御宝蔵出来納置候様ニト被 仰付(御右筆部屋留)

- (6) 『新版 徳川美術館蔵品抄』⑤ 初音の調度(徳川美術館、二〇〇五年)一三九頁一四四頁に「初音の調度関係資料」として翻刻がある。ただし、「初音時絵書棚」二基と「胡蝶蒔絵書棚」一基の三基を一件とするなど、現状とは数え方に異なるがある。

- (7) 九州国立博物館の文化財用X線CTスキャナ(YCT Modular、エクスロン・

インターナショナル株式会社)を使用した。

- (8) 精製水で水練りした小麦粉に、生正味漆を練り合わせてつくる接着剤。

- (9) 麦漆に麻の繊維および木粉を混ぜて合わせる。

- (10) 精製水を含ませた地の粉に生正味漆を混ぜ合わせる。

- (11) 大西智洋 口頭発表「国宝「初音の調度」のうち、初音時絵書棚と胡蝶蒔絵書棚にみる木地構造・加工精度と損傷の関係」(文化財保存修復学会 第四十五回大会 於大阪、国立民族学博物館、二〇一三年)。

- (12) 「御道具出入帳 御書物共」(什器古帳第三十六号)、徳川美術館蔵。

- (13) 香山里絵「尾張徳川家における世襲財産附属物」(『金鯢叢書』四五、徳川黎明会、二〇一八年)。

- (14) 香山里絵「明倫博物館から徳川美術館へ―美術館設立発表と設立準備」(『金鯢叢書』四二、徳川黎明会、二〇一五年)。

(徳川美術館 学芸部部長代理)

金鯨叢書 第五十一輯〔年一回刊行〕

——史学美術史論文集——

令和六年三月三十日 編集
令和六年三月三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川義崇海

発行者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950) 〇一一一番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話(3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話(935) 六二六二番(代)

印刷所

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話(533) 六八六〇番(代)